

地域自然回復のために

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 理事長 村田 源
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5
TEL 075-432-0026 FAX 075-432-0026
URL: <http://www.crrn.net> E-mail: info@crrn.net

社会科学研究者の環境研究

森林再生支援センター専門委員
池上甲一（近畿大学）

わたしの専門分野は農業社会経済学である。もちろん、自称である。日本には、社会経済史学会はあるが、社会経済学それ自体の学会はない。韓国には社会経済学会があるが、欧米の状況はよく知らない。社会と経済の順番を入れ替えた経済社会学という分野は日本にも存在している。この学会は、社会学者としての名前のほうがよく知られている高田保馬に起源を持つ。どちらかという理論的研究が中心で、しかもマクロの問題を扱う人が多い。だから、経済社会学には農業とか農村（山村、漁村）とかのこまごました具体的な問題を扱う人はほとんどいない。

他方、農業経済学会では社会学的素養を持つ人がいないわけではないが、やはり少数派である。また、農村社会学それ自身を名称とする学会もない。最近では、農村社会学の講義を開設する大学も減っている。そうした中で、日本の農村社会研究は、農村社会学、経済史、農業経済学、民俗学などの分野の人たちからなる日本村落研究学会（元の村落社会研究会）が主要な舞台となっている。

以上のような研究分野の棲み分けに対して、わたしがこれまで追求してきた問題はいずれの領域にも収まりきらない。個別の問題領域としては、水・土地などの農業的利用、農村振興（村おこし）、自然エネルギー、東部・南部アフリカ農村の社会と発展方向、いわゆる南北問題やその克服策としてのオルタナティブ・トレード、さらには農業思想や教育思想、そして環境問題と非常に多岐にわたっている。最近ではなんと里山研究にも携わっている。わたしの研究室を訪ねた人たちは書棚の本や資料を眺めて、たいてい「ご専門はなんですか」と質問してくる。試みに、いま例示したような問題を貫く軸あるいは論理が見えないのだろう。それは、旧来の学問分類にとらわれているからにほかならない。だから、いくらそれについて説明を試みても、まず理解してもらえない。というわけで、わたしは農業社会経済学という、分かったような分からないような「専門」分野を標榜することになっているのである。

コンベンショナルな科学の枠組に従って、

専門分化し細かい事柄を研究していると、どうしても自分の位置が分からなくなりがちである。専門化信仰に拘りすぎると、何のために研究しているのか、研究者としての当事者性や社会的責任をどう考えるのか、そして何よりも誰のために研究するのか、といった基本的な問題意識が薄くなりがちである。とりわけ、今後の人類社会に多大な影響を与えるに違いない環境問題や南北問題、食料問題はまさに立場性を問われる問題である。だからこそ、研究者としての倫理性と総合的・複合的な視野が問われるのである。

このような問題意識を持つようになったのは、農業経済専攻の院生だった頃の体験に根ざしている。それは 1970 年代後半のことで、社会科学のコースに在籍するわたしが環境の問題など持ち出すと、まず大半の人たちが不可解な顔をしたものである。「でも、水質を分析するわけではないでしょう?」とか「農経で大気汚染を取り扱うの?」といったような問いがやってくる。よくて、ちょうど運動が始まったばかりの有機農業関係者が「農薬や化学肥料の被害を明らかにしてください」と少しピントのはずれた仲間扱いをしてくれた程度である。つまり、環境問題は分析科学で、衛生工学や理学部の専売特許だと考えられていたのである。

30 年あまり前の日本では、環境と社会とのかわりなど、誰も想像することさえできなかった。だから、「環境なんて理科系研究者や技術者に任せておけばよく、農業経済を勉強するのならまっとうに価格や消費者余剰のことをやる方がよいし、第一、社会系で環境なんてやっても飯が食えないでしょ」と注意してくれる人も少なくなかった。それほど、社会科学では環境問題をフレームワークに取り込もうとする姿勢は弱かった。

現在でも、理科系研究者の中には環境は自然科学の問題だと断言してはばからない人たちが少なくない。そういう中で、2006 年 11 月 6 日に開かれた通称地球研の国際シンポジウム「水と未来可能性」の方向性はたいへん興味深かった。このシンポジウムには、30

人弱の農学部学生を引率して参加したが、予想以上にきちんとしたフレームワークを設定していることに感心した。当日の公開講演会ではユネスコのゴードン・ヤング氏と地球研所長の日高敏隆氏がスピーチをしたが、ともに技術に加えて社会科学の必要性を力説していたことが印象的だった。ヤング氏は高地水文学、日高所長は動物行動学の研究者で、ともに世界に冠たる自然科学者である。両氏とも、環境問題の根底に人間を据えるという視角を共有している。さすがにこうした一流の自然科学者になると、自然科学の限界と可能性をきちんと弁えているものだと感心した次第である。

わたしもこれまでに、いくつかの文理融合や自然科学と社会科学の統合を目指す研究チームに属したことがある。ところが、いつもなかなかうまくいかない。その原因のひとつが自然科学研究者の「蛸壺主義」だった。自分の専門以外のことには関心を示そうとしないし、しかもその専門がたとえばオサムシの分類だったりする。おまけに、社会科学は「科学ではない」と見なしている節が言葉の端々に見え隠れする。こういう状況では全く折り合う糸口さえつかめない。何度か苦い思いをした経験があるだけに、環境研究とは人間や社会の研究だと考えるヤング氏や日高所長のような研究者が増えることを望んでいる。

わたしはこれからも農業社会経済学を標榜しつつ、一見したところ脈絡のなさげに見えるいろいろな分野を紡ぎ合わせながら、社会科学者の目線から環境と人間の問題を考えていきたいと思う。



特定非営利活動法人 森林再生支援センター

第 8 回定時総会 議事録 / 活動報告会 開催報告

日 時：平成 18 年 7 月 30 日（日）午後 1 時～5 時

場 所：京大会館 101 号室・219 号室（京都市左京区吉田河原町 15-9）

出席者：当日参加 13 名、委任状 36 名 計 49 名

第一号議案 平成 17 年度（平成 17 年 7 月 1 日～平成 18 年 6 月 30 日）事業報告

・特定非営利活動に係る事業

地域自然環境の保全、再生に係る調査及び研究

1．尾瀬至仏山・戸倉山林関連調査業務（東京電力（株）、尾瀬林業（株）委託）

a．「至仏山保全対策調査結果に関する勉強会」の実施、委員の派遣等を行った。

b．戸倉山林自然環境資源（植物相）調査（15 年度、16 年度、17 年度（補完）に調査実施）をもとに、技術広報資料を作成。この資料は、平成 18 年 5 月に「尾瀬の森を知る ナチュラリスト講座」（高田研一著、東京電力（株）監修）というタイトルで山と溪谷社より出版された。

c．「戸倉山林カラマツ人工林広域・概況調査」の実施。16 年度に行った調査区とタイプの異なる調査区を設定し基礎データの収集を目的に調査。16 年度調査データも合わせ検討し、今後のカラマツ林の森林管理の方向性や利活用方針について提案を行った。

2．「世界遺産大峯山脈奥駆道の植生保全に関する基礎的研究 - とくに近年の日本ジカ増加の影響評価 -」（独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金助成金）

平成 17 年度地球環境基金助成金を受け、世界遺産大峯山脈前鬼において植生変化の実態の解明のためのモニタリング調査区および防鹿柵の設置を行った。また、シカの食害等による植物相変化の現状を地元の方々に公表し、問題を共有するために、大峯山脈の麓にある天川村にてワークショップ「世界遺産をシカから守れ - 大峯山脈の自然再生に向けて - 」と写真展「大峯の自然いま・むかし」を開催した。

また、地球環境基金助成金を受け昨年度に行った

シンポジウム「シカと森の『今』をたしかめる」の内容をもとに「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」（湯本貴和・松田裕之編）が平成 18 年 3 月に文一総合出版より出版された。

3．紀勢町土砂採取場岩盤跡地における森林再生緑化工事の経年調査（大成建設（株）委託）

三重県紀勢町の土砂採取場岩盤跡地において法面現地調査を行い、自然回復緑化施工後のモニタリング調査を昨年度に引き続き行った（2 年目）。平成 18 年度も引き続きモニタリングを行う予定である。

4．地域性苗木研究

平成 17 年 7 月の総会后、地域性種苗についての現状と問題点を考えるシンポジウム「 - 地域遺伝子に配慮した - 地域性種苗の諸問題」を開催した。このシンポジウムには京都府近県ばかりでなく、東京都、千葉県、埼玉県、山梨県、静岡県など全国から約 120 名の参加者があり、関心の高さが伺えた。

5．自然再生研究

奈良県下におけるシカの食害状況の調査・研究を昨年度に引き続き行った。

地域自然環境の保全、再生に係る実施計画及び実施事業

1．岩井川ダム法面緑化モニタリング等検討業務（奈良県委託；パシフィックコンサルタンツ(株)と提携）

シカによる激しい食害下にある法面において、既往緑化区域、新規緑化区域における緑化植物及び自然侵入植物の生育状況の調査及びシカによる食害状況の把握を行う調査を引き続き行うとともに、法面植栽設計を行った（4 年目）。

地域自然環境の保全、再生に係る行政機関、事業主体、特定非営利活動法人、及び市民ボランテ

ィア団体への助言または技術的援助

1. フィールドソサイエティーへ法然院裏山植生管理計画策定支援、フィールドソサイエティー主催「善気山で観察の森づくり」へ講師を派遣した(専門委員2名)。
2. 府民の森ひよし森林倶楽部へ植生調査の講師を派遣した(専門委員1名、会員1名)。
3. 都市計画審議会(奈良県)へ委員を派遣した(専門委員1名)。
4. グリーンマネジメント検討会(国土交通省)へ委員を派遣した(専門委員1名)。
5. 次世代システム研究会へ講師を派遣した(専門委員1名)。
6. 「森林ボランティア養成講座」(京都府長岡京市主催)に講師を派遣した(専門委員1名)。
7. 京都府西山の森林ボランティア団体へ森づくりに関する助言を行った(専門委員1名)。
8. 長野県阿智村での講演会「阿智村の植生と美しい森づくり」に講師を派遣した(専門委員1名)。
9. 「毎日新聞社創刊135周年記念事業 比叡山大植樹祭」に質問状を提出。植樹に使われる樹種の変更を求めた。

地域自然環境の保全、再生に係る講演、出版、教育事業

1. -2の事業の中でワークショップ「世界遺産をシカから守れ - 大峯山脈の自然再生に向けて -」を開催した。
2. -4の事業の中でシンポジウム「地域遺伝子に配慮した - 地域性種苗の諸問題」を開催した。
3. 16年度に実施したシンポジウム「シカと森の『今』をたしかめる」の内容がもとに単行本「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」が出版された。
4. -1の委託事業で提出した報告書が単行本「尾瀬の森を知る ナチュラリスト講座」として出版された。

地域自然環境の保全、再生に係る行政機関、事業主体、研究機関、教育機関、学会との交流

1. 「第3回 雲ヶ畑・森の文化祭」(薪く炭く KYOTO・山仕事サークル杉良太郎主催)を後援した。
2. 「森林バイオマス交流会 2006」(薪く炭く KYOTO 主催)を共催した。
3. きょうとの森ネットワーク事業としてメーリ

ングリスト(きょうとの森 ML)管理を引き続きおこなった。また「きょうとの森円卓会議」にも参加(専門委員1名座長)。

4. 「環境NGOと市民の集い」(環境再生保全機構主催)に参加した。
5. 「林業者のつどい」(京都府主催)に参加した。
6. シンポジウム「文化遺産を未来につなぐ森づくり」(文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議主催)に参加した。
7. シンポジウム「府内にひろがる協働の森づくり」(京都府立大学主催)に参加した。

その他本法人の目的達成のために必要な事業

1. ニュースレターの発行
平成17年10月26日、平成18年3月3日、6月30日に発行し、全会員に配布した。
2. ホームページの更新
ホームページの更新を随時行った。

第二号議案 平成17年度会計収支報告

科目		金額	
平成17年7月1日から平成18年6月30日まで 特定非営利活動法人 森林再生支援センター			
収入の部			
1. 会費収入			
入会金(8名分)収入	¥24,000		
年会費(84名分)収入	¥252,000		
賛助会費(9日分)収入	¥90,000		
			¥366,000
2. 事業収入			
H17岩井川ガム法面緑化検討モニタリング業務	¥4,200,000		
尾瀬至仏山・戸倉山林間調査業務	¥9,441,600		
紀勢町土砂採取場岩盤跡地における森林再生緑化工事の経年	¥2,310,000		
			¥15,951,600
3. 助成金			
樹金収入			
フィールドソサイエティー講師謝金	¥180,000		
府民の森ひよし講師謝金	¥72,000		
環境再生保全機構地球環境基金助成金	¥2,397,000		
			¥2,649,000
5. その他収入			
銀行・郵便利息	¥77		
寄付金	¥6,880		
印税(世界遺産をシカが喰う)	¥192,000		
			¥198,957
当期収入合計			¥19,165,557
前期繰越収支差額			¥12,823,541
収入合計			¥31,989,098
支出の部			
1. 管理費			
事務局人件費(税務書類作成税理士報酬含む)	¥2,275,200		
委託金(16年度前半尾瀬至仏山調査報酬)	¥2,649,160		
通信費	¥227,502		
パソコン関連費	¥10,574		
事務用品費	¥25,579		
印刷費	¥39,570		
旅費交通費	¥30,560		
会議費	¥15,050		
車両関係費	¥48,909		
水道光熱費	¥67,286		
地代家賃	¥600,000		
備品費	¥33,945		
修繕費	¥23,131		
保険料	¥169,830		
雑費	¥4,031		
半償還経費	¥2,100		
租税費	¥3,265,060		
			¥9,487,487
2. 事業費			
H17岩井川ガム法面緑化検討モニタリング業務	¥3,035,964		
尾瀬至仏山・戸倉山林間調査業務	¥8,172,034		
紀勢町土砂採取場岩盤跡地における森林再生緑化工事の経年	¥1,756,140		
			¥12,964,138
3. 独自事業費(助成金含む)			
環境再生保全機構地球環境基金助成金	¥2,857,820		
法然院裏山植生管理計画策定支援業務	¥213,780		
府民の森ひよし支援事業	¥36,210		
17年度京都の森ネットワーク	¥11,360		
17年度地域性苗木研究	¥250,303		
17年度自然再生研究	¥200,210		
ニュースレター	¥52,920		
			¥3,622,603
当期支出合計			¥26,074,228
当期収支差額 (当期収入合計-当期支出合計)			¥-6,908,671
次期繰越収支差額 (収入合計-当期支出合計)			¥5,914,870

第三号議案 平成 17 年度会計監査報告

平成 17 年度監査で不正がなかったことが西村尚之監事より報告された。

第四号議案 平成 18 年度（平成 18 年 7 月 1 日～平成 19 年 6 月 30 日）事業計画案

地域自然環境の保全、再生に係る調査及び研究
1. 「世界遺産大峯山脈の植生保全に関する基礎的研究 - 住民参加とモニタリング手法の検討」の実施（独立行政法人 環境再生保全機構 助成金）

18 年度地球環境基金助成金で 3 年目。昨年度に大峯山脈前鬼に設置したモニタリング調査区で追跡調査を行う。また、新たに大峯山脈弥山においても調査区を設置する。ここでは前鬼のような従来型（研究者型）の調査区ではなく、自然環境に関心を持つ住民の参加を得て行う住民参加型の調査区とし、将来的にモニタリングが持続できる体制の基盤作りを目指す。そのため前鬼や弥山で、住民・行政を対象とした森林調査法の習得や森の見方を学ぶことを目的とした体験講座の開催や、弥山のある天川村の協力体制を確立するため、天川村自然再生を考える委員会の発足など行政への協力・支援なども行う。また、今年度は助成金で行う活動の最終年度（3 年目）となるので、3 年間の活動結果をまとめた報告書を作成する。

2. 紀勢町大成建設土取場跡地自然回復緑化施工後調査業務の実施

三重県紀勢町の土砂採取岩盤跡地において法面現地調査を行い、自然回復緑化施工後のモニタリング調査を行う（3 年目）。

3. 地域性苗木研究

地域性苗木の考え方などの確立に向けて、関係諸団体へのヒアリングを行い、調査・研究を進める。

4. 自然再生研究

建設廃土基盤における自然再生型緑化の基礎研究として、苗木活着と初期生長の測定などを行う。

その他、尾瀬の今後を考えるために学術的コンセンサスを得るためのシンポジウムの開催や、比叡山植樹祭後の苗木生育状況のモニタリング調査なども行う。

地域自然環境の保全、再生に係る実施計画及び実施事業

1. 法面の植生復元と鹿の食害対策調査

シカによる激しい食害下にある法面において、既往緑化区域、新規緑化区域における緑化植物及び自然侵入植物の生育状況の調査及びシカによる食害状況の把握を行う調査を引き続き行うとともに、法面植栽設計を行う。

2. 防鹿柵調査

奈良県大台ヶ原に設置される防鹿柵の効果をたしかめるためのモニタリング調査を行う。

地域自然環境の保全、再生に係る行政機関、事業主体、特定非営利活動法人、及び市民ボランティア団体への助言または技術的援助

1. 京都の森のあり方を考え、森林育成を図ることに資する事業

京都の森林について、森林育成を図ろうとする市民団体、社寺、行政機関と協力しながら、調査、実施試験を行うとともに、持続的な森林管理、バイオマス利用のための枠組みについて考える。

2. 府民の森ひよし森林倶楽部へ植生調査の講師を派遣（3 回）予定。

3. 京都の森をつなぐ森林団体ネットワークの支援

多くの市民が森へ向かおうとしている中、地域の自然と人、そこへやってこようとする都会の人々をつなごうとする団体が増えている。このような活動を技術的に支援し、これらの団体をつなぐ核の一つとなる。

4. CSR（企業の社会的責任）活動を推進する企業への支援事業

森林再生に係わる CSR 活動を検討している企業に技術的支援を行う。

地域自然環境の保全、再生に係る講演、出版、教育事業

- 1 の事業の中で森林再生支援センター主催の植生調査講習会を行う。

地域自然環境の保全、再生に係る行政機関、事業主体、研究機関、教育機関、学会との交流

「きょうとの森ネットワーク」に引き続き参加。また、日本生態学会や造園学会等との交流を図る。

その他本法人の目的達成のために必要な事業

1. ニュースレターの発行

2. ホームページの更新

第五号議案 平成 18 年度事業予算案

(平成18年7月1日～平成19年6月30日)

. 収入の部	
1. 会費収入	
入会金(5名)	15,000
年会費(90名)	270,000
賛助会費(10口)	100,000
2. 行政等からの受託費	8,300,000
3. 助成金・謝金	2,400,000
4. 前年度からの繰越金	5,914,870
合計	16,999,870

. 支出の部	
1. 管理費	4,110,000
事務局人件費	1,900,000
通信費(電話代を含む)	250,000
パソコン関連費	100,000
事務用品費	30,000
印刷費	50,000
旅費交通費	50,000
会議費	30,000
水道光熱費	100,000
地代家賃	700,000
備品費	300,000
保険料	200,000
雑費	100,000
租税費	300,000
2. 受託事業に関する調査費	6,640,000
3. 助成金・独自事業に関する調査費	4,600,000
地域自然環境の保全、再生に係る調査及び研究	3,400,000
地域自然環境の保全、再生に係る実施計画及び実施事業	300,000
地域自然環境の保全、再生に係る行政機関、事業主体、特定非営利活動法人、及び市民ボランティア団体への助言または技術的援助	300,000
地域自然環境の保全、再生に係る講演、出版、教育事業	300,000
その他法人の自然環境の保全のために必要な事業	300,000
5. 予備費(次事業年度支払予定の租税費含む)	1,649,870
合計	16,999,870

総会後に「森林再生支援センター 活動報告会『尾瀬の自然保護を考える』」を開催しました(参加者:約30名)

この報告会では、2003年度から約3年間行った尾瀬 至仏山および戸倉山林での調査でわかったことなどについて、調査に関わった本センター専門委員より報告を行いました。

その後、現在、尾瀬で持ち上がっている「至仏山における登山道の付け替えの是非について」等を議題に、参加者を交えて意見交換を行いました。



報告会の様子

開催報告

「天川の森を測ろう 地域の方々とモニタリング」

大峯山脈の荒廃の現状を把握しようと、2004年度から地球環境基金の助成をいただき、大峯山脈の植生についての調査を始めていますが、今年度は2006年9月23日(祝)に地元の人たちと大峯の自然に関心をよせる人たちが協力し、大峯山脈の麓にある天川村の森を調べてみよう(調べていこう)ということで、第1回の植生調査を行いました(参加者29名)。今回調査を行った場所は奈良県吉野郡天川村のなめり付近(通称「ブナの森」)です。まず縦70m、横50mの区画を設け10m格子に測量杭を打ってこれからの調査地と決めました。調査は毎木調査とよばれているもので、樹木の個体ごとに幹に番号札を付け、樹種、胸高周囲長、位置、シカ食害の有無を記録しました。この調査を行うことで、この森林の構造がわかり、さらに将来調査を繰り返すことで、今後の変化をモニタリングすることができます。

調査翌日の24日(日)には、天川村役場にて、前日の毎木調査結果について簡単な報告会を行いました。また、天川村役場の方より天川村の森についてばかりでなく、村の歴史や暮らしの現状、現在抱えている問題などについてもお話をいただきました。

以下には、この植生調査に参加された本センター会員の森本範正さんから寄せていただいた感想(事務局撮影の写真を追加させていただきました)と、森の構造についての簡単なまとめを掲載します。

天川の森を測った

森本範正

9月23日秋分の日、天川村で行われた「天川の森を測ろう」というイベントに参加した。ブナ林の毎木調査をやるうというのである。午前9時45分天川村役場に集合。松井淳先生から主旨などについて説明があった後、車に分乗して出発。坪内谷の林道を尾根筋まで登る。やがて登山口。車を降りて歩き始めた。



この登山道、以前は弥山に登るためのメインルートであり、川合から1日かかりで登ったものだ。今では標高1300m付近まで林道が延び、ずいぶん楽になった。カマツカ・コハウチワカエデ・コミネカエデ・タンナサワフタギ・ブナ・ミズナラ・リョウブなど、小径木の多い二次林の尾根道を歩く。



ウブなど、小径木の多い二次林の尾根道を歩く。

栃尾辻を過ぎてやや登ったところで昼食。この付近やたらと単純なシダ群落が多い。コバノイシカグマとイワヒメワラビだ。どちらもシカの食わないもので、これらが多いことは、スズタケの枯れているのとおわせて、シカが活躍している証拠である。



食後、なめり（山の名前）の北側をまいて東側の鞍部に出る。このあたりからなめりの山頂

に向かってすばらしいブナ林が広がっている。今日の測定場所はここだ。しかし林床の下草はほとんどない。



—昨年5月のこと、この日も参加されていた天川村役場の樋口貢・猪瀬充の両氏にここへ連れてきてもらったことがある。そのとき、双葉をつけたブナの実生苗が林床にたくさん生えていた。しかし今日見渡したところ、ブナの幼樹はほとんど見つからない。みんなシカにやられてしまったようだ。

すでに10mごとに杭が打たれ、天川の森を測る準備はできていた。スタッフのご苦労に感謝する。松井先生より測定の仕方について説明があり、数名ずつ数班に分かれて仕事にかかる。10mの方形枠は横にいくつかと、また上方に向かっていくつかに並んでいた。

班ごとに各方形枠中の樹木の測定を行う。まず枠中の木を選び、樹種を記録し、番号をつけたプラスチックテープをホッチキスでとめる。春日山などでこのような番号をつけた木をたくさん見たが、市販のホッチキスを使うとは知らなかった。つぎに基点の杭から横方向(x軸)と縦方向(y軸)の距離を測っ



てその樹木の座標をきめる。胸高周囲長を測り、樹皮にシカの食痕や角つきの傷があれば記録する。この作業を枠内の比較的大きな木すべてで行うわけだが、それぞれの作業を班に所属する異なったメンバーで担当し、1本終わるごとに作業の内容を別のメンバーと交代する。こうすれば、各班に所属するメンバーがすべての作業内容を体験することになる。



最初の枠が終わると、その上側の枠に移る。こうして次々と上方に移動し、全部終わると今度は下降しながら小さな木を調べる。

こうして全作業を終えることになったが、この日は大きな木の樹高測定はしなかった。しかし最後に1本の木の樹高を測ることになり、その木の根元から横方向に巻尺のテープが引かれた。まず目測で何mあるか当ててみようということになり、何人かの方が答えられた。私はテープにそって、木の頂端がおおよそ45度になる地点まで移動し、そのテープの目盛の数値を答えた。次にスタッフの方が測定器を使って正確に測定し、結果を発表された。私の目測の値は、その結果に一番近く、気をよくしたが正確な数値に2mほど足りなかった。私は自分の身長を加えることを忘れていたのだ。いつものことだが、私はどこか抜けている。

以上で測定作業を終えて帰途につき、役場で解散した。この日の夜と翌日には、宿などで意見交換会が予定されていたが、私は翌日別の行事があるため参加できず、残念ながら帰宅した。

このような調査は、私にとってはじめての体験であり参考になった。やってみてずいぶん手間のかかる仕事だと思った。生態学をやる人は、よくこんな面倒なことをやるものだと思心した。しかしこのような調査をやっておくと、それぞ

れの木に戸籍ができたようなもので、後の変化を追跡するのに具合がよい。何年か経った後、ぼんやりとこの森はブナが減って、オオイタヤマゲツが増えたと言うよりは、これとこのブナが合計何本枯れて、これとこのオオイタヤマゲツがこれだけ成長したと言う方が、きわめて具体性に富み説得力がある。また地元の方が大勢参加されたことは、このようなことに感心をもち、地元の方によって自然保護対策を考えていただく上で、たいへん有益なことであったと思っている。このイベントを計画し、準備されたスタッフのみなさんに感謝する。

【天川村について】



大峯山脈の麓にある人口約1800人の村。1500m~1900mの山々を十数座いただく。標高600mと山間に位置するため夏季はきわめて冷涼で降雨量は比較的多い。稜線部には天然記念物であるオオヤマレンゲ群落や、トウヒ、シラビソの原生林が残り、その下部にはブナ林や中間温帯林がつづく。また大峯山脈の高峻な山岳地帯から流れ出す美しい清流にはキリクチ(弥山水系固有の岩魚)が生息している。

表1 なめりプロットの種組成表

種名	幹数 (胸高直径 5cm以上)	断面積合計 (cm ²)	相対値 (%)	幹数 (胸高直径 5cm未満)
ブナ	88	115,212	69.1	
ウラジロモミ	41	28,941	17.4	7
コハウチワカエデ	23	8,481	5.1	1
ミズナラ	3	5,833	3.5	
ヒノキ	5	2,133	1.3	
ホオノキ	6	1,242	0.7	
オオイタヤメイゲツ	15	1,240	0.7	10
ミズメ	1	903	0.5	
リョウブ	13	806	0.5	3
タンナサワフタギ	19	700	0.4	34
ツガ	1	285	0.2	
カマツカ	6	235	0.1	4
アオハダ	1	201	0.1	2
コシアブラ	1	195	0.1	
エンコウカエデ	2	192	0.1	
アワブキ	2	91	0.1	
フウリンウメモドキ			0.0	5
サルナシ			0.0	1
合計	227	166,689	100	67

表1は今回の調査でわかったなめりプロットの種組成である。種名は胸高断面積合計の大きい順に並べてある。胸高断面積とは、1本の木の幹の高さ1.3mでの断面積(胸高直径から計算する)のことで樹木サイズの指標となる。胸高断面積合計は各種について断面積をまとめた値であり、その合計166,689cm²はプロット面積0.35haに生えているすべての木の円盤の面積を全部足したものになる。ヘクタール当たり換算すると約48m²/haになる。この値は少し大きめで、林としては壮齡林のレベルにあたる。相対値は166,689cm²を100として、それぞれの種がどれだけになるかを示したものである。

ブナが約69%、ウラジロモミが約17%でブナ-ウラジロモミ林である。本数としてはオオイタヤメイゲツも多いが大きいものはあまりない。

胸高直径が5cm未満(高さは50cm以上)のもの(稚樹)は合計で67本。5cm以上のものが227本とくらべて多いのか少ないのか…。一番多いのはタンナサワフタギで低木性の樹種であった。次に多いオオイタヤメイゲツはコハウチワカエデより少し小さめだが立派な木になる。しかしブナまでは大きくなる。ブナの子供はここでは見られない状況であった。ウラジロモミの稚樹は7本あったが、樹皮はぎの痕跡と考えられるものがしばしばあり、立ち枯れをしているものも目立った。

結局、高木性樹種の稚樹は合計しても20本くらいしかなく、このプロットには高木の後継樹がほとんどない状況であるといえるだろう。

センター事務局よりお知らせ

～ 最近の森林再生支援センターの活動～

「善気山で観察の森づくり」に講師派遣

2006年7月9日(日)、9月18日(祝)、11月3日(祝)にフィールドソサイエティー主催の京都 法然院の裏山(善気山)での森づくりに本センター専門委員が講師として参加しました。この森づくりでは、植生調査をしながら必要な間伐を行い、「観察ができる森づくり」を目指しています。今は自然観察を楽しめる南尾根に続く観察路を作っており、次回で完成予定です。

「第8回定時総会」を開催

2006年7月30日(日)に森林再生支援センター第8回定時総会を京大会館(京都市)にて開催しました(本紙に報告掲載)。

「府民の森ひよし」に講師を派遣

「府民の森ひよし 森林倶楽部」主催の植生調査講習会が、2006年8月20日(日)と10月15日(日)に開催され、本センター専門委員ら2名が講師として参加しました。参加者に簡単な植生調査法の講習を行い、森林立地の見方について講義しました。

「京都古事の森 下刈イベント」に参加

2006年9月10日(日)に京都古事の森育成協議会主催の下刈イベントに事務局として専門委員ら3名が参加しました。

このイベントは2002年と2003年に植樹を行った「京都古事の森」(京都市鞍馬山国有林)でのイベントで、下刈の講習会と「京都古事の森」に関する意見交換会が行われました。意見交換会では、現在、シカによる食害対策として行われている、単木保護型の防鹿チューブ(ヘキサチューブ)の撤去後

について(植栽した苗木が大きくなり、2～3年度には撤去をしなくてはならない)をそろそろ考えなくてはならないのではないか等の意見が出ていました。



古事の森に設置されている「ヘキサチューブ」

「天川の森を測ろう - 地域の方々とモニタリング -」を開催

2006年9月23日(祝)・24日(日)に18年度地球環境基金助成金を受け、奈良県天川村にて市民参加で植生調査を行いました(本紙に報告掲載)。その他、2004年度から継続している大峯・前鬼にあるプロットの植生調査も終了し、現在はデータのまとめを行っています。

「平成18年度日本造園学会関西支部大会」で発表

2006年10月15日(日)に京都大学農学部総合館にて開催された「日本造園学会関西支部大会」の分科会「NPOの取り組みと展開」において、本センター専門委員が森林再生支援センターの活動内容について口頭発表を行いました。

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案、センター入会申し込みは下記まで

特定非営利活動法人 森林再生支援センター事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町28-5

TEL/FAX 075-432-0026 E-mail: info@cmn.net URL: http://www.cmn.net